



素粒子物理学実験の現場から

第42回

大阪大学 花垣 和則

科研費

私たちの研究費は、大学の予算で賄われているかということそんなことは決してありません。特に、私たちのような実験系の研究室では、大学の予算だけでは何もできないというのが実情です。また、同じ実験系でも、実用に結びつく研究分野では、企業との共同研究が多かったり、企業からの助成金もあります。しかし、純粋科学、素粒子物理学はその典型ですが、この分野には企業からのサポートはほとんどありません。

では、私たちの研究費がどこから来るかというと、多くの場合が科学研究費補助金(科研費)です。私が自由に使える研究費も100%がこの科研費です。科研費は、大学の予算同様原資は国民の税金なのですが、競争的資金であるところが大学の予算とは大きく違います。つまり、補助期間が終わると次の予算を確保できる保証はありません。大抵は2年から5年間程度が予算を貰える期間で、それを過ぎると資金を求めて新たな申請をしなければなりません。

実は、その申請期間が毎年この時期で、10月終わり頃が提出の締め切りです。かく言う私も今貰っている科研費の一つが今年度で終わるので、新たな申請をしようとその準備を進めています。この研究費がないと研究に支障をきたしてしまいますから、学生やポストを抱える大学教員は、立場、心境的には中小企業の経営者に似ている面があります。研究費がなくても生きていけなくなるわけではありませんが、たとえば学生が実験を遂行できなくなったら、その学生の研究者人生には多大な影響を与えてしまいます。ですから、予算獲得というのはやはり非常に責任のあるものとなります。

そんな科研費ですが、業績、頑張り具合に応じて予算が配分されるという点は公平で良いのですが、採択されるためには補助金を貰っている期間内にそれなりの成果を見込めないとならないという弊害もあります。つまり、あまりにも突飛なアイデアや歳月のかかる研究は採択されづらいのです。これでは骨太の研究はできません。そうは言っても、科研費なくして研究を続けられませんので、ここ数日は夢の中でもアイデアを捻り出すために唸りつつ、申請書類と格闘しています。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科・准教授

CERNでLHC実験に参加